

けい こ

圭子ちゃん

ひろしま おんな こ はなし

広島の子の女の話



はな
話した人: 小野久仁子

か ひと なか ごし なお み
書いた人: 中越 尚美

ど い き こ しりつだいがくげいじゅつがく ぶ
イラスト: 土井紀子 (広島市立大学 芸術学部)

けい こ はなし しんせき き
圭子ちゃんの話は、親戚のおばから聞きました。

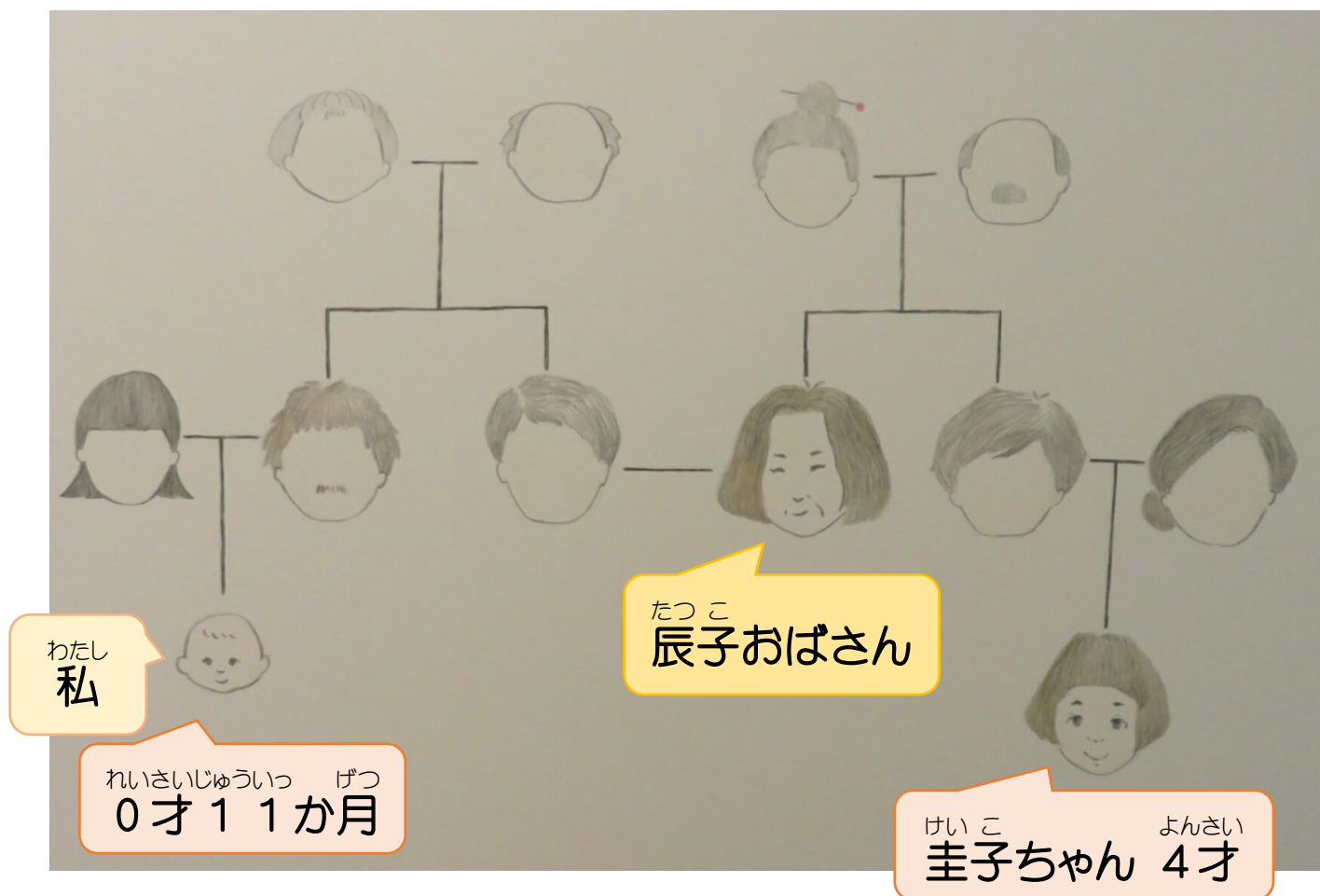
はじ き とき わたし じゅういっさい
初めて聞いた時、私は11才でした。それまで

わたし けい こ し
私は、圭子ちゃんのことを知りませんでした。

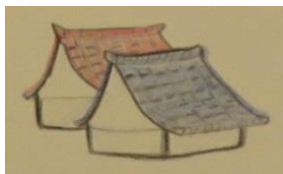


しんせき たつ こ じゅういっさい わたし く に こ
親戚の辰子おばさんと11才の私(久仁子)

けいこ 圭子ちゃんも、たつこ 辰子おばさんも、わたし とお しのせき 私の遠い親戚
です。



せん きゅうひゃく よんじゅうご ねん けいこ よん さい
1 9 4 5 年、圭子ちゃんは 4 才で、
わたし せいごじゅういち げつ とき たつこ
私は 生後 1 1 か月でした。 その時、辰子おばさ
んは、けいこ となり いえ す
圭子ちゃんの隣の家に住んでいました。



けい こ やさ か あ だい す
圭子ちゃんは、優しいお母さんが大好きでした。



せん きゅうひゃく よんじゅう ご ねん に ほん せんそう
1 9 4 5 年、日本は戦争をしていま
した。それで、圭子ちゃんのお父さんは、フィリピン
に行っていました。

はちがつむいか けい こ か あ いっしょ
8月6日、圭子ちゃんはお母さんと一緒に、おば
あちゃんの家に行くことになりました。

はちがつむいか あさ けい こ ろく じ お
8月6日の朝、圭子ちゃんは6時に起きました。

あさ た き い
朝ごはんを食べて、お気に入りのピンクのワンピース
を着ました。



かあ ふく き ま
そして、お母さんが服を着るのを待っていました。

けい こ い
「圭子ちゃん、行きましょう」

かあ すこ け しょう
お母さんは、少し化粧をしてきれいでした。

けい こ
圭子ちゃんはうれしくなりました。

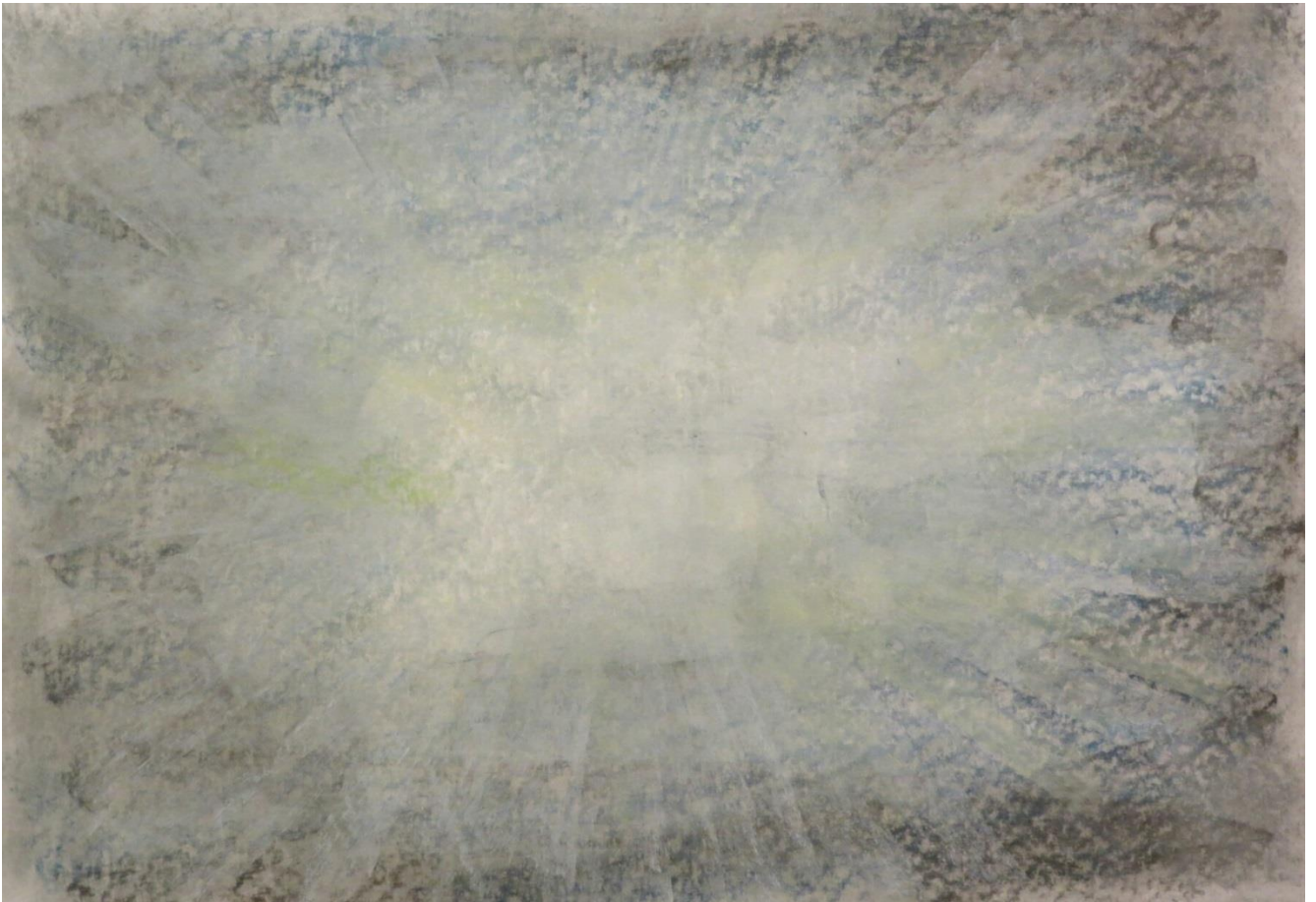
きょう
今日は、おばあちゃんの住む矢賀という町まで、
でんしゃ い
電車で行きます。 お母さんと手をつないで、電車
の
に乗りました。



あさはちじ じゅう ご ぶん
朝8時15分。 圭子ちゃんとお母さんが
の でんしゃ ふくや
乗った電車は、福屋デパートの前に着きました。
とき
その時です。

ぴかっ！

そら きゅう しろ つよ おお ひか
空が急に、白く、強く、そして大きく光りました。



どん！

おお おと
とても大きい、すごい音がしました。

め まえ なに
そして、目の前から何もなくなりました。

^{つよ}強い^{つよ}強い^{かぜ}風^ふが吹きました。^{けい こ}圭子ちゃん^{かぜ}は、風で
^と飛ばされました。^{でんしゃ}電車^{なか}の中から^{そと}外へ^と飛ばされまし
た。



^{いろいろ}デパートやビルや色々なものが^{こわ}壊れました。そし
て、^{まわ}周りは^{こわ}壊れたものだらけになりました。
^{けい こ}圭子ちゃん^{たお}は倒れていました。^め目を^さ覚めたのは、
^じかなり^{かん}時間^たが経ってからです。

「おかあちゃん...」

「おかあちゃーん.....」

けい こ いっしょうけんめい かあ さが
圭子ちゃんは、一生懸命お母さんを探しました。



どこも、^や焼けて^{くろ}黒い^{したい}死体^し(^{ひと}死んだ^{からだ}人の体)がいつ

ぱいでした。^{けい こ}圭子ちゃんは^{こわ}怖くなりました。

^{かあ}お母さんがいなくて、^{かな}悲しくて、^{おお}大きい^{こえ}声で^な泣きました。

そこに、女^{おんな}の人^{ひと}が^{ある}歩いてきました。

「お母^{かあ}さんは、どこ？」



その声^{こえ}を聞^きいた圭子^{けい こ}ちゃんは、ほっとしました。

でも、その人^{ひと}はお母^{かあ}さんじゃありませんでした。

圭子^{けい こ}ちゃんは、また大^{おお}きい声^{こえ}で泣^なきました。女^{おんな}

の人^{ひと}は、とても困^{こま}りました。

その女^{おんな}の人^{ひと}は、圭子^{けい こ}ちゃんといっしょ^{いっしょ}に、お母^{かあ}さん

を^{さが}探^{さが}してくれました。焼^やけた町^{まち}を^{ある}歩^{ある}いて、歩^{ある}いて、

そして、やっとお母^{かあ}さんを見^みつけました。

こわ いろいろ もの した かあ たお
壊れた色々な物の下に、お母さんが倒れていま

した。でも、もう息がありませんでした。



おんな ひと けい こ
その女の人には圭子ちゃんに、

わたし いっしょ い い
「私と一緒にいきましょう」と、言いました。

けい こ かあ
でも、圭子ちゃんは、お母さんのそばにいと

い かあ はな
言いました。お母さんのそばから離れません。

おんな ひと けい こ
どうすることもできなくて、女の人には、圭子ちゃ

かあ となり ね い
んをお母さんの隣に寝かせて、行ってしまいました。

けい こ あつ みず の
圭子ちゃんは熱くて、水が飲みたくなりました。



けい こ ある ひと い
圭子ちゃんは、歩いている人に言いました。

みず
「水ちょうだい」

みず
「お水、ちょうだい...」

みず
「お水……」

でも、みんな、圭子ちゃんをちょっと見て、通りす

ぎて行きました。圭子ちゃんの大きな目から涙

が落ちました。そして、圭子ちゃんは大きな

ため息をつきました。

その日の夕方になりました。朝、圭子ちゃんに声をかけてくれた女の人が、心配して戻ってきました。



でも、圭子ちゃんはもう亡くなっていました。女
の人は、圭子ちゃんをそっとお母さんのそばに
寝かせました。圭子ちゃんはお母さんのそばで
安心したようでした。

これが『圭子ちゃん』の話です。

せん きゅうひゃく よんじゅう ご ねん はちがつ むいか あさはち じ じゅう ご ぶん
1 9 4 5 年 8月6日朝8時15分、

ひろしま げんぱく お ひと
広島に原爆が落とされました。たくさんの人が
し
死にました。 けいこ
圭子ちゃんも、死んでしまいました。

わたし し
でも、私は死にませんでした。



げんぱく
原爆ドームの前で
まへ
はな
話す小野久仁子さん
おのくにこ

たつこ
辰子おばさんは、よく わたし けいこ
私に圭子ちゃんの話をし
てくれました。そして、「けいこ
圭子ちゃんのことを
わす
忘れないで」と言いました。

せんそう
戦争をしてはいけません。 い
生きている今、わたし
いま わたし
私も

みな
皆さんに、 けいこ
圭子ちゃんの話 をしたいと思いました。 おも

1581 字